

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2007～2010

課題番号：19202013

研究課題名(和文) 人物像に応じた音声文法

研究課題名(英文) Speech Grammar based on Speaker's Characters

研究代表者

定延利之(SADANOBU TOSHIYUKI)

神戸大学・大学院国際文化学研究科・教授

研究者番号：50235305

研究代表者の専門分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：日本語・音声言語・人物像(発話キャラクタ)・調音動態・自然会話・コミュニケーション・日本語教育・国語教育

1. 研究計画の概要

本研究は、基盤研究(A)「日本語・英語・中国語の対照に基づく、日本語の音声言語の教育に役立つ基礎資料の作成」(H16-19)の成果をより有用なものにするために、「最終年度前年度申請」制度での申請を行って、認められたものであり、その目標を前科研から継承している。

その目標とは、「音声言語」を教育するために、日本語の「音声言語」がどういう話し方を指すもので、学習者に何をどう教えればよいのかを、現場教師にわかりやすく示すための基礎資料を作成するということである。そのためには、日本語話者がどんな音声をどのように発しており、それがコミュニケーションにおいてどのような行動となり得ているか、調音と発話行為の両面の実態を、それぞれ MRI 実験とコミュニケーションの記録観察を通じて調べ、法則化する作業が必要である。

本研究は、「人物像(キャラクタ)」というこれまでにない概念を新しく導入することにより、「その人らしいしゃべり方」という、これまでよりもきめ細かな音声言語の観察を進め、基礎資料に反映させようとするものである。

2. 研究の進捗状況

ネット上で公開しているもの、CDの形で頒布しているものなど、最終成果物である基礎資料はすでにでき始めており、今後も増えつつある。

基礎資料の一環として「人物像」について

の紹介を出版社(三省堂)のホームページで連載し始めたところ(詳細は末尾に記載)、好評を得て、現在は日本語版に加えて英語版と中国語版も新たに開始している。

これらのもとになった研究成果は、数十件の出版物や百件を超える講演・発表で公表できている。

研究成果の一端を具体的に示すと、まず調音については、日本語の母音「ウ」は従来から「非円唇・奥舌母音」と言われてきていた。教育的にも「平口」ということばかりが強調されてきたが、我々の MRI 実験の結果、「ウ」は舌全体が口腔の前に来ており、「イ」や「エ」に近く、唇の突出度も「オ」に似ていることがわかった。教育の現場で唇の形だけいくら強調しても日本語的な「ウ」は得られないということである。

また、日本語のハ行子音/h/は声門摩擦音であり、口腔の中に摩擦が生じないものだが、中国語の/h/は後舌面と口蓋帆の間で摩擦が行われている。我々の MRI 画像の基礎資料を学習者に示すことで、難しい言葉で説明せずに母語と学習言語の違いが理解できるようになっている。

コミュニケーションに関する成果の例として、考えながら発するはずのフィラー「さー」を挙げる。「さー」は、実は考えても無駄な場合(「さー、わかりません」「さー、このあたりは交番ないんじゃないですか」など)専用のことばであり、「さー」を発する段階で話し手は、実は考えても無駄だと知っている、それにもかかわらず「さー」は日本語のコミュニケーションにおいて自然に用

いられ、「さー」なしで「わかりません」などと即座に返答するよりも、やわらかな印象をもたらす。この発見は、日本語の発話行為が情報伝達一辺倒の観点では説明しきれず、きもちのやりとりのような別の観点が必要であるということを示している。

さらに、この研究計画を通じて育成を目指していた若手研究世代がボルドー大学准教授、中国人民大学外国人専任など、世界規模での新しい研究者層となり、研究者ネットワークが広がっている。

それと相俟って、日本語教育学会に公認されたテーマ領域研究会「日本語音声コミュニケーション教育研究会」と、国際的なネット上の研究会「日本語音声コミュニケーション研究会」を発足することができ、情報交換や講演会、研究会など活動拠点として活発に利用している。

3. 現在までの達成度

①当初の計画以上に進展していると考えられる。というのは第1に、最終成果物と位置づけた基礎資料が、すでに続々とできあがってきている状況にあるからである。

第2の根拠は、その完成済みの基礎資料の中には好評を得て、他言語版（英語版・中国語版）の作成にまで進んでいるものもあるからである（三省堂のホームページ上の連載）。

第3の根拠は、それらの基礎資料のもとになっている研究成果も豊富であり、先述したものも含めて、これまでの「音声言語」研究の「常識」を覆す、インパクトの高いものが少なくないということである。

第4の根拠は、研究者ネットワークの機運が高まる中で、想定していなかった2つの研究会を発足でき、それと相俟って、新しい研究世代が世界規模で育ってくれているということである。

4. 今後の研究の推進方策

今後はこれまでと同様に基礎資料の作成に尽力し、広報にもつとめたい。その関係で、ホームページを整備したい。

それとともに、新しい概念「人物像(キャラクター)」とはどのようなものか、これがなぜどのように日本語の「音声言語」に関わっているのかについて、これまでの成果をもとにしつつも、さらにわかりやすく工夫した概説書を出版し、基礎資料の補足としたいと考えている。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①定延利之「話し手は言語で感情・評価・態

度を表して目的を達するか?—日常の音声コミュニケーションから見えてくること—」『自然言語処理』第14巻、第3号、言語処理学会、pp. 3-15.査読有り、2007

[学会発表] (計3件)

①定延利之(招待講演)2008年8月27日「日本語のことばとキャラクタ」The Association of Japanese Language Teachers in Europe, The 13th Symposium on Japanese Language Education in Europe (Troy Culture Centre, Canakkale Onsekiz Mart University, Turkey)『ヨーロッパ日本語教育(Japanese Language Education in Europe)』(ISSN 1745-7165)13(2009), pp. 19-27.

②定延利之(招待講演)2009年9月10日「コミュニケーションと言語における「体験」」日本認知科学会第26回大会(於慶應義塾大学藤沢キャンパス)

③定延利之(招待基調講演)2009年10月17日「「体験」概念の意義と可能性」『国際シンポジウム 認知言語学の拓く日本語・日本語教育の研究と展望』10-15. (於北京大学)

[図書] (計2件)

①定延利之 2008『煩惱の文法—体験を語りたがる人びとの欲望が日本語の文法システムをゆさぶる話』筑摩書房(200頁)

②定延利之・中川正之(研究協力者)(編)2007『音声文法の対照』くろしお出版(224頁)

[その他]

①定延利之 2008「日本語社会のぞきキャラくり」三省堂ホームページ(三省堂 Word-Wise Web)上での連載

日本語版

<http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/author/sadanobu/>

英語版

<http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/author/sadanobu-e/>

中国語版

<http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/author/sadanobu-c/>

ホームページ

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/products/nihongo/pubs.html>